

大学生の社会的態度に関する研究*

後藤宗理 久世敏雄 宮沢秀次¹⁾
二宮克美¹⁾

I 問題意識

青年期に、社会と社会での出来事に対する見方や考え方は、どのように形成され変容されていくのであろうか。われわれは、この問題を検討するために、これまで名古屋大学教育学部附属中学校および高等学校の生徒を対象にして、中学生および高校生の社会的態度の発達と変容の過程に関する調査研究を行ってきた(久世ほか, 1974, 1975, 1977, 1978, 1979)。そこでは、社会的態度の発達と変容の過程を明らかにするために、横断的方法だけでなく、縦断的方法も用いて資料の収集を行なった。

これまでの研究の成果として次の点があげられる。①社会的態度を保守的、革新的、大衆社会的態度の3つの側面からとらえたとき、中学生・高校生の社会的態度はほとんど変化がみられず安定している。②いずれの学年においても革新的態度得点が最も高い。さらに、保守的の態度と革新的の態度との間には負の相関関係が、保守的の態度と大衆社会的態度との間には正の相関関係が認められる。また、縦断的調査資料によると、それぞれの態度についての時点間相関は、中学生・高校生の6年間を通してかなり多くの相関が有意である。③女子において、次第に大衆社会的態度得点が高くなる傾向があり、しかも時点間相関も6年間を通してすべての相関が有意である。

以上の結果から、青年期の社会的態度は安定していると考えることができる。しかし一方、われわれは、これまで1つの中学校および普通科高校をサンプルとして資料を得たにすぎない。したがって、結果を一般化するためには、ほかの高校生、例えば商業科、工業科、農業科の生徒からも同様の結果が得られるかどうかという検討

が必要である。同様のことは、高校生以外の青年についてもいえる。その代表例として、各種の大学に所属する青年たちがどのように社会的態度を形成しているのかという検討が必要になる。

青年は、高校生あるいは大学生の時期に、興味や関心が明確になり、将来の生活設計との関連において社会や人生に対する考え方を形成するようになる。つまり社会についての認識の発達、青年期における進路選択と深いつながりがあるといえる。このように考えると、高校の時点で普通科に在籍しているのかそれとも職業科に在籍しているのか、あるいは、高校卒業後就職するか進学するかは青年期の社会的態度の発達過程と密接な関連をもっている。また、大学に進学する場合にも、4年制大学に進学するのか短大に進学するのか、さらに文科系か理科系か、また国公立か私立かなどの要因は、それぞれ青年期の社会的態度の発達および変容の過程にさまざまな影響を及ぼすものと思われる。

そこでわれわれはまず、本研究において、大学生を対象とした調査研究を行なうことにする。本研究では、大学の種別によって青年の社会的態度の様相がどのように異なるのか、また、男子と女子とではどのようなちがいがあのかという点の検討を行なう。

II 方法

1. 社会的態度に関する質問紙

これまで中学生・高校生を対象に実施した質問紙のうち一部の項目を修正して、大学生用社会的態度調査インベントリーを作成した。具体的な質問紙を末尾に掲げた。質問紙はこれまでと同じ様に、保守的、革新的、大衆社会的態度を表わすそれぞれ13項目、計39項目から構成されている。表1には、それぞれの態度ごとに項目を並べかえたものを示した。ここで項目番号1から13までが保守的の態度項目、14から26までが革新的の態度項目、27から39までが大衆社会的態度項目である。

* 本研究の資料分析のための計算は、名古屋大学大型計算機センター FACOM 230-75によった。

1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期課程)教育心理学専攻

表1 質問項目

項目番号		項目番号	
1	国の政治は政治家にすっかりまかせた方がよい	22	政治をよくするためには、もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである
2	女が政治などに口だしすべきでない	23	家庭内の仕事は男女平等に分担すべきである
3	結婚は家柄を重んじなければならない	24	「方角が悪い」などということはまったく信用しない
4	伝統や習慣は尊重すべきである	25	結婚式などの儀式はなるべく簡素化するのがよい
5	世間をわたるには義理や人情が最も大切である	26	家庭では子どもの意見も大人の意見と同等に尊重されるべきである
6	長男が家をつぐのは当然だ	27	流行語などはよく知っていないとはずかしい
7	親孝行は子どもの義務である	28	労働者や大学生のストライキやデモ活動などは関心がない
8	目上の人にはもっと敬語を使った方がよい	29	みんなが見ているテレビ番組を見ていないと、とりのこされる気がする
9	学校で定めている校則にはどんな場合にも従うべきである	30	国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない
10	世の中の秩序を守るために上下関係はなくてはならない	31	高校や大学時代には政治の問題など考えるよりレジャーを楽しんだ方がよい
11	日本は天皇を中心にまとまるべきである	32	理論よりフィーリングやムードが大切である
12	デモやストでさわぐのは民主国家の恥である	33	誰が衆議員の選挙で当選しようと日本の政治はかわらないと思う
13	家庭では父親がすべての実権をにぎるのが望ましい	34	今の世の中では平凡な家庭の中にささやかな幸福を求めた方がよい
14	個人の自由は尊重すべきである	35	共同募金や歳末助け合い運動があるとなるべくさけるようにする
15	正しいことであれば世間体など気にすべきではない	36	ベトナム戦争など日常生活とかけはなれた政治問題など考えるのはめんどろだ
16	いくら恩義のある人でも筋道のとおらない頼みごとは断った方がよい	37	いつの世でもお金がなければ幸福にはなれない
17	社会のために正しいことであるなら親の反対をおしきっても行動すべきである	38	皆と同じような持物や服装をしていないとひげめを感じる
18	いくら伝統だからといっても不合理なことはやめるべきである	39	公害問題は被害者と加害者だけの問題である
19	デモやストをするのは労働者の当然の権利である		
20	先輩の意見でも、まちがっていると思えば、納得できるまで議論する		
21	男女の交際は全く自由であり、まわりの人がとやかく言うべきでない		

結果を整理する際には、各被調査者のそれぞれの項目に対する反応が、非常に賛成の場合に5点、賛成の場合に4点、賛成とも反対ともいえない場合に3点、反対の場合に2点、非常に反対の場合に1点を与えて得点化した。そして、3つの社会的態度それぞれについて合計値を算出し、各態度の得点とした。態度得点は、39点を中間点として13点から65点の範囲をとり、数値が大であるほどその態度の傾向が強いことを示している。

2. 調査対象

被調査者は、愛知県下の国立4年制大学2校、国立短期大学1校、県立短期大学1校、私立4年制大学6校、

私立短期大学3校のそれぞれ1年生あるいは2年生である。

大学種別・性別による傾向のちがいを検討するために、私立短期大学女子、国公立文系男子、国公立文系女子、国公立理系男子、国公立理系女子、私立4年制大学男子、私立4年制大学女子という、7グループを設定して、上記の大学・短大の被調査者をふりわけた。大学種別・性別グループごとの被調査者数を表2に示した。このうち、国公立理系男子および同女子のグループには、国立および県立短期大学各1校の被調査者が含まれている。

国公立理系グループにおいて短大生のデータを4年制大学生のデータと合併することの適否を検討するために、

表2 調査対象の内訳

大学種別	性別	総数	学 年	
			1 年	2 年
私立短大	女子	320	316	4
国 公 立	文系	男子	42	111
		女子	33	119
	理系	男子	222	23
		女子	111	1
私立4年 制大学	男子	281	169	112
	女子	303	187	116

国公立4年制大学理系グループのデータと国公立短大のデータとを比較したところ、有意な差が全くみられなかったため、両者をまとめて国公立理系グループとして扱うことにする。また、私立4年制大学グループでは1校だけ理科系クラスが含まれているが、他大学のデータと有意な差はみられなかったため、1つのグループとして扱う。

各グループの学年構成は、表2の通りである。2年生が比較的多い国公立文系男子および女子、そして私立4年制大学男子および女子の4グループについて、グループごとに1年生の多い大学のデータと2年生の多い大学のそれとを比較したところ、国公立文系男子以外のグループで、おもに大衆社会的態度得点に有意な差がみられた。しかし、全体の傾向に著しく影響するとは思われなかったため、以下では1、2年生を合わせて分析していくことにした。

3. 調査実施時期

調査は、昭和53年5月上旬から7月上旬にかけて、集団実施によって行なわれた。

4. 結果の整理

当初の目的に沿って、次の観点から結果を整理した。

1) 各社会的態度の平均態度得点ならびに各社会的態度相互の関連は、大学の種別や性別によってどのような様相を示すかを検討する。

2) 大学種別および性別によって分けた7つのグループにおいて、態度構造がどのように異なっているのか、その内容を因子分析によって検討する。

3) 7つのグループの特徴を明らかにするために、上記の分析結果に加えて、一部の項目についてさらに詳細な検討を行なう。

III 結 果

1. 大学種別・男女別にみた各社会的態度得点および態度間相関

表3には、3つの態度得点の平均と標準偏差を大学の種別・性別によるグループごとに示した。それぞれのグループでの3つの態度得点を比較してみると、いずれのグループにおいても、革新的態度得点が高いことがわかる。

表3 大学種別・性別にみた各社会的態度得点の平均と標準偏差

大学種別	性別	社会的態度				
		平均・標準偏差	保守的	革新的	大衆社会的	
私立短大	女子	M (SD)	34.58 (4.50)	46.50 (4.41)	35.65 (5.65)	
国 公 立	文系	男子	M (SD)	34.51 (5.34)	46.72 (4.80)	34.81 (6.52)
		女子	M (SD)	33.03 (4.95)	47.27 (4.72)	34.83 (6.40)
	理系	男子	M (SD)	34.50 (5.48)	47.17 (4.76)	34.23 (5.85)
		女子	M (SD)	33.41 (4.86)	46.73 (4.28)	33.45 (4.94)
私立4年 制大学	男子	M (SD)	36.20 (5.20)	47.00 (4.45)	35.11 (5.60)	
	女子	M (SD)	36.22 (4.89)	45.81 (4.07)	36.24 (5.53)	

それぞれの態度についてグループ間で比較したところ、保守的態度については、私立4年生大学の男子および女子の得点が、他のグループの得点よりも高く、この2つのグループでは保守的傾向が他のグループよりも強いことが示された(両グループとも、私立短大女子、国公立文系女子、国公立理系男子および女子との間で $P < .001$; 国公立文系男子との間では $P < .01$)。一方、国公立文系の女子の得点は、国公立理系女子を除く他のいずれのグループの得点よりも低かった(私立短大女子、私立4年制大学男子および女子との間で $P < .001$; 国公立理系男子との間で $P < .01$; 国公立文系男子との間で $P < .05$)。このことから、国公立文系女子では保守的傾向が最も弱いことがわかる。

大学生の社会的態度に関する研究

つぎに、革新的態度についてみると、表から明らかなように、私立4年生大学女子の得点が他のグループの得点に比べて低い（国公立理系女子、私立4年生大学男子との間で $P < .001$ ；国公立文系女子との間で $P < .01$ ；私立短大女子、国公立文系男子、国公立理系女子との間で $P < .05$ ）。さらに、大衆社会的態度得点は、私立4年制大学女子の場合に、私立短大女子を除く他のいずれのグループよりも高いこと（国公立理系男子、同女子との間で $P < .001$ ；国公立文系男子、同女子、私立4年制大学男子との間で $P < .05$ ）、また私立短大女子の方が国公立理系男子、同女子よりも高い（それぞれ $P < .01$, $P < .001$ ）こと、そして私立4年制大学男子の方が国公立理系女子より高い（ $P < .001$ ）ことが明らかにされた。したがって、私立4年制大学女子ではとくに、大衆社会的傾向が強いといえる。

以上の結果から明らかなように、私立4年制大学女子グループでは、保守的、大衆社会的傾向が強く、革新的傾向が弱いこと、また私立4年制大学男子グループでは保守的傾向が強いことがうかがわれた。

表4 大学種別・性別にみた態度間相関

大学種別		社会的態度		保守的 —革新的	保守的— 大衆社会的	革新的— 大衆社会的
		性別				
私立短大	女子			-0.279***	0.272***	-0.046
国公立	文系	男子		-0.527***	0.394***	-0.516***
		女子		-0.443***	0.567***	-0.243***
	理系	男子		-0.526***	0.391***	-0.314***
		女子		-0.509***	0.576***	-0.273**
私立4年制大学	男子		-0.344***	0.378***	-0.203***	
	女子		-0.331***	0.400***	-0.136*	

注) 表中 * 印は相関係数の有意性が $P < .05$, ** 印は $P < .01$, *** 印は $P < .001$ であることを示す。
以下 *, **, *** 印に関しては同様である。

表4には、グループごとに求めた態度間相関を示した。私立短大女子における革新的態度と大衆社会的態度との相関を除いて、他のすべての相関が有意であった。すなわち、保守的態度と革新的態度との間、そして革新的態度と大衆社会的態度との間には負の相関関係が、また保守的態度と大衆社会的態度との間には正の相関関係が認められた。

2. 各グループの態度構造

ここでは因子分析によって各グループの態度構造を明

表5 因子負荷行列（被調査者全体）

因子 項目 番号	I	II	III	IV
1	0.51	0.13	0.09	-0.08
2	0.40	0.04	0.00	-0.12
3	0.12	0.23	0.21	-0.32
4	-0.10	0.57	0.10	-0.11
5	0.10	0.40	0.10	0.09
6	0.25	0.34	0.03	-0.15
7	-0.00	0.44	-0.00	0.06
8	-0.03	0.43	-0.01	0.01
9	0.08	0.33	0.02	-0.12
10	0.13	0.39	0.00	-0.10
11	0.28	0.33	-0.04	-0.11
12	0.52	0.20	0.00	-0.15
13	0.32	0.37	0.05	-0.09
14	-0.03	-0.06	0.01	0.38
15	-0.07	-0.01	-0.34	0.39
16	-0.10	-0.01	-0.19	0.24
17	-0.16	-0.09	-0.09	0.41
18	-0.02	-0.28	-0.03	0.31
19	-0.34	-0.10	0.11	0.24
20	-0.21	0.13	-0.28	0.31
21	0.16	-0.09	0.10	0.44
22	-0.17	-0.09	0.06	0.26
23	-0.17	-0.07	0.04	0.21
24	-0.04	-0.33	-0.10	0.11
25	-0.03	-0.33	-0.02	0.17
26	-0.06	-0.02	0.07	0.34
27	0.10	0.10	0.54	0.14
28	0.51	0.08	0.08	-0.08
29	0.11	0.09	0.51	0.08
30	0.53	0.09	0.16	-0.11
31	0.64	0.01	0.29	0.09
32	0.35	0.09	0.27	0.19
33	0.32	-0.01	0.11	-0.00
34	0.30	0.26	0.21	0.03
35	0.19	-0.21	0.18	-0.13
36	0.58	-0.07	0.24	-0.07
37	0.20	0.01	0.36	-0.07
38	0.08	0.11	0.52	-0.04
39	0.50	-0.01	0.14	-0.12

らかにし、グループ間の比較を行なうことにする。

まず、われわれの得た全サンプルの態度構造を調べることにした。この目的のために、共通性の反復推定をする主因子解による因子分析を行ない、さらに正規バリマックス回転を施して因子負荷行列を得た。その結果が表5である。なお、抽出する因子数は、固有値の減衰状況などから4因子が適当であると考えられた。

表5に基づいて、第I因子に負荷量の高い項目を順に掲げてみると、次の通りである。

- 31「高校や大学時代には政治の問題など考えるよりレジャーを楽しんだ方がよい」
- 36「ベトナム戦争など日常生活とかけはなれた政治問題など考えるのはめんどろだ」
- 30「国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない」
- 12「デモやストでさわぐのは民主国家の恥である」

1「国の政治は政治家にすっかりまかせた方がよい」

これらの項目の内容から、第I因子は政治的無関心の因子と考えることができる。

第II因子に負荷量の高い項目は、

- 4「伝統や習慣は尊重すべきである」
- 7「親孝行は子どもの義務である」
- 8「目上の人にはもっと敬語を使った方がよい」

などである。この例からもわかるように、第II因子には、伝統的倫理観を意味する項目をはじめ、いわゆる家中心の考え方を受容することに関する項目など、保守的態度項目が含まれている。したがって、第II因子は、保守的態度因子であると考えられる。

第III因子に負荷量の高い項目をみると、

- 27「流行語などはよく知らないとはずかしい」
- 38「皆と同じような持物や服装をしていないとひげめを感じる」
- 29「みんなが見ているテレビ番組を見ていないと、とりのこされる気がする」

などの項目があり、われわれが当初設定した大衆社会的態度項目のなかでも、仲間への同調を示す項目から構成されていることがわかる。ここでは、第III因子を大衆社会的同調傾向の因子と呼んでおく。

第IV因子に負荷量の高い項目のうち代表的なものは、

- 21「男女の交際は全く自由であり、まわりの人がとやかく言うべきでない」
- 17「社会のために正しいことであるなら親の反対をおしきっても行動すべきである」
- 15「正しいことであれば世間体など気にすべきではな

い」

14「個人の自由は尊重すべきである」

など、民主的な価値観や個人の主体的な行動の尊重にかかわる項目が多い。これらの内容は、われわれのいう革新的態度と重なるところが多いので、ここでは第IV因子を革新的態度因子と呼んでおこう。

つぎに、各グループの態度構造を検討するために、上の場合と同じ手順で、グループごとの因子負荷行列を得た。

抽出する因子数を決定するために、まず、因子分析の結果から固有値の変化を調べてみた。表6に示したように、第7因子までの固有値の減衰状況および7グループの固有値の大きさから、ここでは一律に第4因子までを抽出することにした。なお、表6から明らかなように、グループによって固有値の減衰状況が異なることから、因子構造もかなりの違いがみられることが予想された。

表6 大学種別・性別に行なった因子分析に基づく固有値の変化

		順位							
		1	2	3	4	5	6	7	
大学種別	性別								
私立短大	女子	4.30	3.07	2.31	1.90	1.56	1.49	1.33	
国立 公立	文系	男子	6.88	3.12	2.31	1.95	1.88	1.60	1.54
		女子	7.26	2.96	2.03	1.85	1.69	1.51	1.47
	理系	男子	5.65	2.81	2.55	1.75	1.69	1.53	1.44
		女子	6.62	2.56	2.44	2.04	1.89	1.73	1.60
私立4年 制大学	男子	4.71	3.09	1.99	1.87	1.66	1.48	1.43	
	女子	5.15	2.80	2.33	2.12	1.64	1.52	1.41	

グループ間で因子構造についての比較をする際の手がかりを得るために、グループ別に得られた4因子の因子負荷行列に関して Tucker の因子類似性係数*を求めた。その結果が表7である。因子間の関連をみるために、私立短大女子グループの4つの因子を基準にして、因子ごとに各グループでの最大係数をみることにした。

* 用いられた式は次の通りである。なお、ここで、 l_{jm} は因子負荷を、添字 j は変数を、 m 、 m' は因子を表わす。

$$\phi_{mm'} = \frac{\sum_j l_{jm} l_{jm'}}{\sqrt{\sum_j l_{jm}^2} \sqrt{\sum_j l_{jm'}^2}}$$

表7 Tuckerの因子類似性係数(4因子の場合)

大学種別	私立短大 女子				国公立文系 男子				国公立文系 女子				国公立理系 男子				国公立理系 女子				私立4年制大学 男子				私立4年制大学 女子			
	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV
私立短大 女子	1.00																											
	-0.14	1.00																										
	0.19	-0.22	1.00																									
	-0.40	-0.08	-0.02	1.00																								
国公立 文系 男子	0.90	-0.30	0.18	-0.38	1.00																							
	0.14	-0.28	0.82	-0.01	0.20	1.00																						
	-0.46	0.44	-0.16	0.66	-0.44	-0.19	1.00																					
	-0.60	0.40	-0.49	0.19	-0.52	-0.34	0.41	1.00																				
国公立 文系 女子	0.91	-0.20	0.32	-0.62	0.82	0.28	-0.64	-0.59	1.00																			
	-0.21	0.74	-0.60	0.16	-0.36	-0.56	0.45	0.54	-0.36	1.00																		
	0.44	-0.03	0.79	-0.10	0.35	0.76	-0.20	-0.61	0.48	-0.35	1.00																	
	-0.22	0.53	-0.15	-0.26	-0.38	-0.29	0.06	0.24	-0.10	0.27	-0.15	1.00																
国公立 理系 男子	0.90	-0.38	0.30	-0.20	0.88	0.30	-0.41	-0.69	0.81	-0.40	0.50	-0.46	1.00															
	0.12	-0.17	0.92	-0.13	0.14	0.84	-0.19	-0.39	0.32	-0.64	0.74	-0.01	0.25	1.00														
	0.50	0.00	0.19	- 0.84	0.51	0.18	- 0.72	-0.21	0.70	-0.27	0.26	0.13	0.30	0.26	1.00													
	-0.19	0.77	-0.43	0.09	-0.31	-0.45	0.51	0.53	-0.28	0.81	-0.37	0.42	-0.40	-0.43	-0.18	1.00												
国公立 理系 女子	0.92	-0.23	0.35	-0.32	0.88	0.33	-0.40	-0.67	0.87	-0.37	0.57	-0.30	0.92	0.30	0.45	-0.30	1.00											
	-0.16	0.63	-0.55	-0.20	-0.28	-0.63	0.23	0.53	-0.16	0.75	-0.51	0.44	-0.42	-0.53	0.06	0.70	-0.31	1.00										
	0.43	-0.08	0.79	-0.41	0.40	0.64	-0.38	-0.50	0.60	-0.49	0.69	-0.07	0.38	0.77	0.59	-0.29	0.48	-0.29	1.00									
	-0.38	0.52	-0.17	0.54	-0.48	-0.17	0.74	0.36	-0.56	0.57	-0.16	0.01	-0.39	-0.21	-0.54	0.63	-0.37	0.25	-0.31	1.00								
私立4年制大学 男子	0.92	-0.18	0.24	-0.36	0.90	0.21	-0.42	-0.65	0.84	-0.29	0.50	-0.28	0.88	0.19	0.47	-0.27	0.91	-0.26	0.43	-0.39	1.00							
	-0.13	0.10	- 0.87	0.09	-0.16	- 0.79	0.14	0.18	-0.30	0.48	- 0.68	0.08	-0.17	- 0.88	-0.33	0.32	-0.24	0.37	- 0.76	0.13	-0.15	1.00						
	-0.13	0.79	-0.29	-0.03	-0.32	-0.42	0.37	0.26	-0.18	0.71	-0.20	0.54	-0.36	-0.33	-0.11	0.73	-0.22	0.67	-0.17	0.38	-0.13	0.32	1.00					
	0.55	-0.28	0.19	- 0.71	0.50	0.12	- 0.79	-0.35	0.72	-0.37	0.21	0.06	0.43	0.18	0.72	-0.46	0.47	-0.09	0.43	-0.80	0.51	-0.16	-0.15	1.00				
私立4年制大学 女子	0.92	-0.16	0.32	-0.37	0.88	0.22	-0.38	-0.60	0.87	-0.36	0.48	-0.18	0.86	0.28	0.48	-0.24	0.92	-0.21	0.53	-0.42	0.91	-0.26	-0.15	0.50	1.00			
	-0.07	0.14	- 0.91	0.15	-0.08	- 0.80	0.21	0.41	-0.27	0.59	- 0.72	0.01	-0.18	- 0.90	-0.25	0.39	-0.23	0.50	- 0.73	0.22	-0.12	0.82	0.25	-0.17	-0.19	1.00		
	-0.25	0.84	-0.29	-0.03	-0.33	-0.40	0.53	0.39	-0.31	0.68	-0.21	0.44	-0.45	-0.26	-0.11	0.76	-0.28	0.68	-0.17	0.52	-0.21	0.26	0.81	-0.38	-0.21	0.22	1.00	
	0.47	0.04	0.02	- 0.81	0.39	0.05	- 0.66	-0.31	0.65	-0.10	0.14	0.26	0.29	0.05	0.69	-0.08	0.36	0.10	0.28	-0.48	0.40	-0.01	0.07	0.70	0.33	-0.14	-0.10	1.00

表8 因子負荷行列 (国公立文系女子)

因子 項目番号	I	II	III	IV
1	0.54	-0.03	0.22	-0.24
2	0.40	-0.25	0.14	-0.07
3	0.39	-0.35	0.19	0.11
4	0.04	-0.27	0.40	-0.13
5	0.06	-0.01	0.56	0.23
6	0.35	-0.44	0.18	0.17
7	0.07	-0.23	0.35	0.28
8	0.08	0.02	0.42	-0.10
9	0.18	-0.08	0.26	-0.17
10	0.15	-0.19	0.39	-0.06
11	0.29	-0.29	0.19	-0.14
12	0.42	-0.17	0.37	-0.24
13	0.40	-0.17	0.38	0.03
14	0.02	0.33	-0.01	0.15
15	-0.25	0.42	0.21	-0.01
16	-0.22	0.29	-0.08	-0.01
17	-0.34	0.46	0.18	0.05
18	0.18	0.41	-0.21	0.19
19	-0.04	0.37	-0.02	0.57
20	-0.50	0.19	0.02	0.08
21	0.23	0.32	0.06	0.12
22	-0.09	0.12	-0.08	0.60
23	-0.07	0.43	-0.16	0.13
24	-0.17	0.52	-0.13	-0.12
25	-0.10	0.33	-0.26	0.22
26	0.02	0.41	-0.12	0.02
27	0.49	0.02	-0.08	0.27
28	0.61	-0.02	0.11	-0.21
29	0.38	-0.10	-0.07	0.10
30	0.58	-0.21	0.01	-0.07
31	0.73	-0.06	0.21	0.07
32	0.37	-0.10	0.12	0.18
33	0.43	0.23	0.21	-0.02
34	0.53	-0.20	0.08	-0.02
35	0.30	-0.02	0.04	-0.05
36	0.67	0.06	0.28	-0.16
37	0.53	0.02	0.10	0.05
38	0.44	-0.03	0.06	-0.03
39	0.45	0.03	0.31	0.03

表9 因子負荷行列 (私立4年制大学)

因子 項目番号	I	II	III	IV
1	0.55	-0.16	0.01	0.02
2	0.62	-0.09	-0.01	-0.08
3	0.15	-0.29	-0.43	0.32
4	-0.11	-0.57	-0.10	0.05
5	0.10	-0.30	0.12	0.03
6	0.23	-0.33	-0.27	0.14
7	0.12	-0.48	0.11	0.12
8	-0.15	-0.33	0.02	-0.11
9	0.09	-0.18	-0.19	-0.21
10	0.07	-0.48	-0.16	0.02
11	0.46	-0.23	-0.16	-0.18
12	0.49	-0.07	-0.19	0.06
13	0.33	-0.40	-0.12	-0.02
14	0.07	0.06	0.42	-0.01
15	-0.15	0.02	0.43	-0.21
16	-0.11	-0.10	0.24	-0.02
17	-0.09	0.06	0.48	-0.07
18	0.03	0.29	0.20	-0.05
19	-0.20	0.00	0.16	0.10
20	-0.26	-0.19	0.27	-0.09
21	0.29	0.16	0.47	0.14
22	-0.12	-0.03	0.21	0.06
23	-0.17	0.24	-0.02	0.16
24	-0.02	0.27	-0.08	-0.08
25	0.00	0.29	0.24	-0.06
26	-0.08	-0.01	0.38	0.07
27	0.21	-0.04	0.24	0.47
28	0.49	-0.05	-0.08	0.17
29	0.13	-0.15	0.14	0.40
30	0.66	0.10	-0.18	0.10
31	0.65	0.02	0.09	0.18
32	0.49	-0.12	0.18	0.22
33	0.22	0.04	-0.09	0.29
34	0.48	-0.26	0.01	0.09
35	0.07	0.10	-0.13	0.43
36	0.51	0.14	-0.19	0.16
37	0.00	-0.12	-0.14	0.53
38	0.04	-0.14	-0.01	0.49
39	0.45	0.07	-0.13	0.14

私立短大女子の第Ⅰ因子は、他のすべてのグループの第Ⅰ因子と対応がみられたので、この因子については、どのグループでもかなり内容の近い因子が得られたと考えることができる。一方、私立短大女子の第Ⅱ因子は、国公立文系女子ならびに理系女子の第Ⅱ因子と対応がみられ、また私立4年制大学男子、同じく女子の場合には第Ⅲ因子と対応がみられる。さらに、国公立理系男子の場合には第Ⅳ因子で対応がみられるが、国公立文系男子の場合この私立短大女子の第Ⅱ因子と対応する因子が見出されなかった。このように、因子の抽出順序に違いがあるものの一対応する因子が国公立文系男子を除くグループにおいて見出された。

私立短大女子の第Ⅲ因子の場合には、国公立文系女子と理系女子ではそれぞれの第Ⅲ因子が対応しているが、その他のグループではその第Ⅱ因子が対応する因子として見出されている。

つぎに、私立短大女子の第Ⅳ因子と他のグループの残りの因子との対応関係をみてみると、国公立文系男子および理系男子の第Ⅲ因子、私立4年制大学男子および女子の第Ⅳ因子との類似性係数が高いことがわかる。またこれら4グループ間でも対応するこの4つの因子が相互に類似性が高く、同じ内容の因子構造をもっていることがわかる。一方、国公立文系女子および理系女子の第Ⅳ因子は、他のグループとの間に対応する因子が見られなかった。

これまでの結果から、一部で対応する因子が見出せなかった国公立文系男子、同じく女子および理系女子では、因子構造の内容が3因子であったと思われる。

このように因子分析によって解釈可能な因子構造を求めたとき、グループによるちがいがあることから、つぎにわれわれは、解釈可能な因子として4因子を得たグループと、4因子抽出したところ3因子しか解釈できなかったグループとを比較していくことにする。

3因子グループの代表例として表8には、国公立文系女子の因子負荷行列を示した。一方、表9には4因子グループの例として、私立4年制大学女子の因子負荷行列を示した。

2つの表を比較しながら、各因子の内容について検討していく。表8から明らかなように、国公立文系女子では、第Ⅰ因子で負荷量の高い項目は、項目番号1, 2, 12, 13, 27, 28, 30, 31, 33, 34, 36, 37などであり、保守的態度項目の一部と大衆社会的態度のほとんどの項目に負荷量が高い。このことから、第Ⅰ因子は大衆社会的因子と呼ぶことができる。私立4年制大学女子の場合

にも同じように、第Ⅰ因子は、大衆社会的態度を表わす項目と保守的態度項目の一部とで構成されている(表9)。ただし、国公立文系女子グループとは異なり、第Ⅰ因子で負荷量の高い項目が、先の全サンプルを対象に行なった因子分析の場合の第Ⅰ因子と同じように、政治的無関心を示す項目に限られていることがこのグループの特徴である。したがって、私立4年制大学女子のグループでは、第Ⅰ因子は政治的無関心因子とみなすことができる。なお、他のグループにおいても、この第Ⅰ因子に対応する因子の内容は、解釈可能な因子数にかかわらず、政治的無関心に関するものであった。

つぎに、表8の第Ⅱ因子についてみる。この因子は、いわゆる革新的態度に関する項目から構成されており、革新的態度の因子とみなすことができる。私立4年制大学女子のグループで、この第Ⅱ因子に対応する因子は、表9の第Ⅲ因子である。両グループとも、この因子に含まれる項目の内容は、全サンプルを対象に行なった因子分析の場合の第Ⅳ因子と同じように、民主的な価値観と個人の主体的な行動を尊重することを基本的な考え方にしている。なお、他のグループでも、国公立文系男子を除いて、この因子と対応する因子を見出すことができる。

国公立文系女子の第Ⅲ因子は、保守的態度項目によって構成されている。項目の内容を検討してみると、その中でもとくに、いわゆる伝統的な倫理観ならびに家中心思想の受容に関する項目が多い。この因子は表9の私立4年制大学女子グループでは、その第Ⅱ因子と対応している。そして、負荷量の高い項目も国公立文系女子の場合と重複してみられるものが多い。同様の結果は、他のグループでも認められるが、国公立理系女子の場合には、保守的態度項目と大衆社会的態度項目のうちの、いわゆる大衆社会的同調傾向を示す項目とが結びついて1つの因子を構成している。

この大衆社会的同調傾向に関係した項目が1つのままとりとして見出される場合には、4因子まで抽出しても解釈が可能であるが、先の国公立理系女子の場合のように、それらの項目群が他の因子と結びついている場合に、3因子までしか解釈できないことが多い。表8から、国公立文系女子の場合もこれと同じケースであることがわかる。一方、表9から、私立4年制大学女子における第Ⅳ因子は大衆社会的同調傾向の因子と呼ぶことができる。さらに表7から、この因子と対応する因子を他の多くのグループにおいて見出すことができる。

これまでの結果から明らかなように、われわれが当初

設定した保守的、革新的、大衆社会的態度のそれぞれの核になる項目群を見出し、それぞれ因子として命名することができた。しかし同時に、いわゆる大衆社会的同調傾向の因子が、独自の因子として存在するのか、あるいは他の大衆社会的態度項目と結びつくのか、それとも保守的の態度項目と関連しているのかによって、因子構造が変わることも示された。

3. グループ別項目別得点

大学種別・性別による7つのグループの特徴を明らかにするために、まず、全サンプルをまとめて行なった因子分析の結果に基づいて、サンプル別の因子得点を算出した。その因子得点のグループごとの因子別平均値の結果が表10の上段である。

表10 大学種別ならびに下位グループごとにみた因子別平均因子得点

下位グループ		因子				
		I	II	III	IV	
私立短大	女子	0.010	0.044	0.084	0.034	
国立	文系	男子	-0.072	-0.158	0.024	-0.075
		女子	-0.151	-0.232	0.036	0.016
	理系	男子	0.010	-0.319	-0.139	-0.077
		女子	-0.209	-0.112	-0.190	-0.073
私立4年制大学	男子	0.053	0.171	-0.027	0.140	
	女子	0.122	0.291	0.090	-0.046	
男子全体		0.009	-0.080	-0.056	0.013	
女子全体		-0.007	0.061	0.043	-0.010	
国公立文系全体		-0.111	-0.195	0.030	-0.030	
国公立理系全体		-0.059	-0.254	-0.155	-0.076	
私立短大4年制全体		0.061	0.166	0.051	0.040	
国公立男子全体		-0.022	-0.257	-0.076	-0.076	
国公立女子全体		-0.176	-0.181	-0.060	-0.022	
私立4年制全体		0.089	0.233	0.034	0.043	

2. で述べたように、表10に表示した第I因子から第IV因子の内容はそれぞれ、政治的無関心因子(第I因子)保守的の態度因子(第II因子)、大衆社会的同調傾向因子(第III因子)、革新的の態度因子(第IV因子)である。表10によれば、政治的無関心因子については、私立4年制大学女子の得点が高く、また国公立文系女子と理系女子において得点が低い。このことから、前者では政治的無関心の傾向が強く、後者でその傾向が弱いことがわかる。

つぎに、保守的の態度因子をみると、私立4年制大学男子および女子で得点が高く、国公立文系男子および女子、理系男子および女子で得点が低い。したがって、前者では保守的の傾向が強いが、後者ではその傾向が弱いと考えられる。これら2つの因子に比べると、第III因子、第IV因子では、第III因子の一部を除いてグループ間に著しい差異は認められない。

これまでの結果から、当初設定した7グループは、さらにいくつかのグループにまとめることができそうである。7つのグループを、大学の種別や性別を考慮に入れて、再編成するために、合併後のグループの平均因子得点を試算した。その結果が表10の下段である。表から明らかなのは、まず第1に、男子と女子との差は非常に小さいこと、また第II因子のグループ別平均因子得点が最も変化に富んでいること、さらに、そのなかでも国公

表11 項目別平均値と標準偏差(第II因子)

項目番号	大学種別 平均・標準偏差	私立短大	国公立	国公立	私立4年
		女子	文系全体	理系全体	制大学全体
4	M (SD)	3.48 (0.72)	3.43 (0.73)	3.26 (0.78)	3.51 (0.81)
5	M (SD)	3.14 (0.77)	3.03 (0.80)	2.99 (0.82)	3.23 (0.83)
6	M (SD)	2.22 (0.87)	2.35 (0.91)	2.45 (0.89)	2.52 (0.93)
7	M (SD)	3.72 (0.84)	3.69 (0.77)	3.76 (0.81)	3.81 (0.79)
8	M (SD)	3.63 (0.72)	3.53 (0.75)	3.50 (0.75)	3.74 (0.74)
9	M (SD)	2.29 (0.77)	2.29 (0.74)	2.40 (0.82)	2.39 (0.83)
10	M (SD)	3.39 (0.78)	3.17 (0.83)	3.27 (0.90)	3.46 (0.85)
11	M (SD)	2.03 (0.88)	1.87 (0.82)	1.76 (0.83)	2.03 (0.89)
13	M (SD)	2.42 (0.94)	2.35 (0.89)	2.49 (0.92)	2.64 (0.95)
24	M (SD)	2.95 (1.00)	3.22 (1.01)	3.44 (1.12)	2.83 (1.04)
25	M (SD)	3.32 (0.91)	3.65 (0.84)	3.64 (0.85)	3.35 (0.90)

表12 項目別平均値の検定結果 (第Ⅱ因子)

項目番号	私立短大女子 国公立文系	私立短大女子 国公立理系	私立短大女子 私立4年制大学	国公立文系 国公立理系	国公立文系 私立4年制大学	国公立理系 私立4年制大学
4		∇ ***		∇ **		∧ ***
5		∇ ***			∧ ***	∧ ***
6		∧ ***	∧ ***		∧ **	
7			∧ *			
8		∇ *	∧ *		∧ ***	∧ ***
9						
10	∇ ***				∧ ***	∧ **
11	∇ ***	∇ ***			∧ **	∧ ***
13			∧ ***	∧ *	∧ ***	∧ **
24	∇ ***	∇ ***		∇ **	∧ ***	∧ ***
25	∇ ***	∇ ***			∧ ***	∧ ***

注) 表中, ∇印は比較対の上段にあるグループの平均値が下段のそれより大きいことを, また∧印は下段のグループの方が上段よりも大きいことを示す。なお, 項目24, 25については, 因子負荷行列での符号が逆転しているため, 上の表でも∇印の方向を実際の数値の大小関係とは逆向きにして図示した。

立文系, 国公立理系, 私立4年制大学という3群にまとめ直した場合に最もグループ間の差がはっきりしていることなどである。そこで, 以下の分析では, この3群に私立短大女子グループを加えた4群について検討を加える。

これまでの分析によって, 4つのグループを区別するときに興味ある情報を提供しているのは, 第Ⅱ因子(保守的傾向因子)に関する項目群である。そこで, まず, 第Ⅱ因子に負荷量の高い項目について, グループ別の平均と標準偏差を求めた。その結果が表11である。

つぎに, 第Ⅱ因子に関係のある項目について, 4グループの間で相互に平均値の差の検定を行なった。その結果を表12に示した。6つの組合せを検討してみると, まず第1に, 国公立文系と理系との間には大きなちがいが認められないということがわかる。第2に, 私立短大女子と他のグループとを比較してみると, 国公立文系との間および理系との間には, かなり多くの項目で有意差がみられた。そして全体の傾向として, 私立短大女子の方が国公立文系および理系よりも保守的傾向の傾向が強いことがわかる。なおここでの唯一の例外は, 項目番号6「長男が家をつぐのは当然だ」である。項目6は, 私立短大女子よりも国公立理系において支持されている。

私立短大女子と私立4年制大学を比べてみると, 4項目で私立4年制大学の方が平均値が高く, 私立短大女子よりもやや保守的傾向が強いことをうかがわせる。この

傾向は, 国公立文系・理系と私立4年制大学とを比較してみると一層明らかであり, 私立4年制大学の方が項目別平均値が大きく, 保守的傾向が強い。

これらのことから, 第Ⅱ因子にかかわる項目では, 全体として, 他のグループに比べると私立4年制大学グループに支持される傾向がある。いいかえれば, 4つのグループの中で私立4年制大学が最も保守的な傾向を示していることになる。

IV 討 論

1. 本研究で得られた結果の概略

われわれは, 大学生の社会的態度の様相がどのようなのかを検討するために, 私立短大女子, 国公立文系男子, 同女子, 国公立理系男子, 同女子, 私立4年制大学男子, 同女子の7グループから資料を得た。おもな分析結果は次の通りである。

(1) 態度別平均得点および相関について

①社会的態度を保守的, 革新的, 大衆社会的という3つの側面から捉えると, 大学の種別・性別にかかわらず, いずれのグループにおいても革新的態度得点が高他の2つの態度得点よりも高い(表3)。

②態度ごとにグループ間で態度得点を比較してみると, 保守的傾向については, 私立4年制大学男子および女子の得点が最も高く, 国公立文系女子の得点が低い。革新的傾向については, 私立4年制大学女子の得点が高他のグルー

に比べて低く、逆に、大衆社会的態度得点については、そのグループの得点が最も高い（表3）。

③グループごとに3つの態度間の相関を求めてみると、私立短大女子の一部を除いてすべての組合せで有意な相関が得られた。そして、保守的態度と革新的態度ならびに革新的態度と大衆社会的態度との間には負の相関関係が、また保守的態度と大衆社会的態度との間には正の相関関係が認められる（表4）。

(2) 態度構造について

④被調査者全体のデータによる因子分析の結果から、4因子を抽出することが適当であると思われる。各因子の内容を検討してみると、第Ⅰ因子は政治的無関心因子、第Ⅱ因子は保守的態度因子、第Ⅲ因子は大衆社会的同調傾向の因子、第Ⅳ因子は革新的態度因子とみなすことができる。

⑤グループごとの因子構造の内容を比較検討するために、Tuckerの因子類似性を求めた。その結果、4つの因子のうち3つまでは、ほとんどのグループで対応する因子がみられるが、4因子すべてについて対応関係がみられるのは、私立短大女子、国公立理系男子、私立4年制大学男子、同女子の4グループにすぎないことがわかる。

⑥上記⑤の結果から、解釈可能な因子が3因子のグループと4因子のグループとがあると考えられる。両グループの因子構造を比較してみると、2つのグループに共通しているのは保守的態度因子と革新的態度因子である。一方、大衆社会的態度因子は3因子グループでは1つの因子として扱われているが、4因子グループでは政治的無関心と大衆社会的同調傾向とに分けて考えることができる。

(3) 因子得点と項目別平均について

⑦グループ別に因子別平均因子得点を求めたところ、第Ⅰ因子と第Ⅱ因子においてはグループ間に差が認められるが、残りの2つの因子においては目立ったちがいは認められない。

⑧因子得点に基づいてグループの特徴をみると、私立4年制大学女子グループにおいて、政治的無関心の傾向が強く、国公立文系女子と理系女子においてその傾向が弱い。また私立4年制大学の男子と女子では保守的傾向が強く、国公立文系男女および理系男女で保守的傾向が弱い。

⑨第Ⅱ因子に関係する項目それぞれについて詳細に検討したところ、私立短大女子は、国公立文系全体や理系全体よりも保守的傾向が強い。さらに、私立4年制大学

グループは、上記3グループよりもなお保守的傾向が強い。

2. これまでの研究結果との比較

ここでは、全般的な傾向について、これまでの研究結果と比較検討してみよう。

本研究で得られた結果のうち、まず第1に、革新的態度得点が高く、保守的態度と大衆社会的態度の得点が高いという傾向は、これまでわれわれが中学生と高校生を対象に行なってきた研究の成果と同じものである（久世ほか、1974、1975、1977、1978）。また、ほとんどのグループにおいて、保守的態度と革新的態度との間および革新的態度と大衆社会的態度との間には負の相関関係がみられること、さらに保守的態度と大衆社会的態度の間には正の相関関係がみられることなど、これまでの知見と一致する結果を得ることができた。これらの結果から、われわれが設定した3つの社会的態度は、中学生や高校生ばかりでなく大学生においても比較可能な測定であることがわかる。

それでは、態度構造の内容はどうであろうか。因子分析を行なったところ、全体としては4つの因子が得られたが、グループによっては、保守的、革新的、大衆社会的という3因子によって説明ができるという結果もみられる。4つの因子で説明ができるグループでは、一般に大衆社会的態度項目が政治的無関心に関する項目と大衆社会的同調傾向に関する項目とに分かれている。そしてさらに、政治的無関心の因子には保守的態度項目の一部が含まれているために、4因子の場合には、保守的態度因子の内容は、伝統的な倫理観と家中心思想の受容に関する項目だけになっている。

これまでわれわれは、中学生や高校生を対象にして縦断的調査を行ってきたが、そこで得られた資料をさまざまな角度から検討した結果をみても、必ずしも当初設定した3つの態度で十分に理解できるとは思われない。とくに、クラスター分析の結果からは、大衆社会的態度の一部の項目と保守的態度の一部とが1つのクラスターを形成しており、上で述べたのと同じような内容が示された（久世ほか、1978）。このように、研究開始時と比べて内容に変化があらわれることは、長期にわたる研究の場合やむをえないことであるし、また、青年の行動を理解する上で新しい把握のしかたが有効になる場合もあり、時代の影響も考慮に入れながら柔軟に対処する必要がある。

3. 大学種別・性別による大学生の社会的態度の比較

大学生の社会的態度の様相は、大学の種別や性別によってどのように異なっているのであろうか。本研究における知見をまとめてみると、次のような特徴が指摘できる。

まず第1に、保守的の態度得点が私立4年制大学男子および女子において最も高く、国公立文系女子において最も低い。したがって、私立4年制大学の男子および女子では保守的の傾向が他の群に比べて強いといえる。また私立4年制大学女子は、革新的の態度得点が低く、大衆社会的の態度得点が高いという結果も得られている。

因子分析の結果を検討してみると、3つの因子が解釈可能な因子であったグループと4因子がそれであったグループとがあり、4因子見出された私立短大女子、国公立理系男子、私立4年制大学男子、そして同女子の計4グループでは、大衆社会的態度の内容を政治的無関心と大衆社会的同調傾向とに分けて考えることができた。

因子得点に基づいてグループの特徴をみると、私立4年制大学女子で政治的無関心の傾向が強く、国公立文系女子と理系女子においてその傾向が弱い。また、私立4年制大学男子および女子では保守的の傾向が強く、国公立文系男女および理系男女で保守的の傾向が弱い。

大学種別について項目別平均値の検定結果を比較してみると、私立4年制大学全体で保守的の傾向が強いことがわかる。一方、国公立文系全体と理系全体との間にはほとんど差がなく、しかも保守的の傾向も私立4年制大学全体あるいは私立短大女子に比べると弱い。

これまでの結果から、まず第1に、私立4年制大学グループの傾向は、国公立文系あるいは理系グループの傾向と非常に対照的であることがわかる。しかもこのことは、男女別々に検討した結果からも認められる。第2に、因子得点などに基づいて大学種別ごとに、性別によるちがいを検討したところでは、各種別の中での男女のちがいはあまりみられない。したがって、これらのことから基本的には大学種別によるちがいが大きいと考えられる。

大学生がどの専攻分野に所属するかということが価値観の形成と深いかかわりをもっているという指摘は、狩野（1967）などにみられる。彼は国立の4年制大学の新生生の価値観が入学の時点ですでに進学する学部によって大きく異なっていることを見出している。このことは、学部の選択が青年の価値観や興味に基づいてなされると考えることができる。しかし、われわれが本研究において見出したような、専攻分野よりもむしろ大学の設立主体によるちがいが青年の社会的態度の発達に関係し

ているという結果は、どのように理解すればよいのだろうか。

本研究では、被調査者は大学1年生ばかりでなく一部に2年生も含んでいる。そして、調査時期も5月から7月にわたっているなど必ずしも被調査者の状況は一様ではない。しかしそのちがいにについては、2年生の多い国公立の文系と1年生主体の理系との間に大きな差がみられないことから、ここでは、被調査者の状況はほとんど同じであると考えていく。一般に、ここで得られたような知見から、高校卒業後の進路選択と個々人の社会的態度との間に結びつきがあると考えられることもできる。しかしここではむしろ、大学入学以後調査時点までにそれぞれの大学において、一種の集団規範が形成されつつあると考える方が適当ではないだろうか。なるほど、高校卒業後の進路選択、とくにどの専攻分野を選ぶか、あるいは4年制大学に進学するのか短大に進むのかという問題は、自らの興味や価値観と深い関係にある。しかし、われわれが今日の高校卒業後の進路選択の実態をみると、大学の選択や学部の選択に際して、青年自身の興味・関心と並んで学業成績や所属する学科などの要因を無視するわけにはいかない（経済企画庁、1978）。とくに、国公立大学への入学者が高等教育機関への進学者のなかできわめて少数のグループに入ること、そして、入学のためにはかなりの準備教育が必要であることを考えると、われわれが得たように、設立主体によって学生の態度にちがいがみられることは、むしろ当然といわざるをえない。

われわれはこれまで、中学生・高校生に社会的態度の発達過程を明らかにするために、名大附属中学校および高校において縦断的調査を行ってきた。その分析結果から、被調査者の中に、中学1年の時点から大衆社会的傾向が強く、高校になると保守的傾向も強くなるグループと、中学2年頃から革新的傾向が強く、保守的の態度と大衆社会的態度の傾向が弱いグループ、さらに2つのグループの中間に位置するグループの3群があることが示された（久世ほか、1979）。一方、大学生を対象とした本研究においても、私立4年制大学グループでは保守的の傾向が強く、国公立文系および理系グループでは革新的傾向が強く保守的の傾向や大衆社会的傾向が弱い、という結果を得た。

これら2つの調査結果は、直接比較することはできないが、関連づけて検討する可能性は残されている。つまり、それぞれの大学において、大学入学後に青年たちの間で一種の集団規範として、一定の社会的態度が形成さ

れたり変容されていくとき、各々の集団において規範を形成する上での核となる青年たちは、すでに高校時代までにあるタイプの態度や行動様式を完成させているのではないだろうか。これまでの結果から1つの予想としてこのような関連づけも可能に思われる。しかもわれわれは、1つの中学校および普通科高校のサンプルに基づいて検討したにすぎないが、高校段階での社会的態度の様相と大学段階でのそれとの関連を考えると、相対的に国公立大学への進学者が多い高校、例えば学校群に含まれる高校の普通科の生徒と、それ以外の普通科高校の生徒とのちがいを検討する必要に迫られてくる。さらに、一般に進学希望の高校生と就職希望の高校生とでは人生に対する態度が異なるという指摘もあるが（日本リクルートセンター、1979）、社会的態度の発達と変容という点に関しては、どのような差異がみられるのか、このような問題も、すでに指摘したように、検討すべき課題として残されている。

最後に、女子青年の社会的態度についてみておこう。本研究において示されたように、全体として男子と女子との差は小さく、むしろ、女子青年の中での大学種別による違いが顕著にみられた。依田（1973）は、大学生の価値構造を検討するなかで、男子の場合には小学生から大学生の間に道徳的価値観は家庭指向から社会指向へと変化していくが、女子の場合には、高校以後、所属する学校が公立か私立か、あるいは共学高校か女子高校かなどによって、発達の方向が異なってくると指摘している。すなわち、公立・共学高校生あるいは4年制の男女共学の大学生は社会指向型を示すが、私立・女子高校生あるいは女子短大生は小学校以後変化せずに家庭指向型を示しつつけるという。このことは、所属集団における規範の問題と深いつながりをもつと考えられるのであるが、多くの女子の場合に、性役割意識が小学生の頃形成されたまま大学生まで持続していくということと関連があると思われる。本研究では、私立4年制大学女子が他のグループに比べて保守的傾向が強いことが示された。また、詳しくは検討しなかったが、因子得点の比較からは、国公立文系および理系の女子に比べて、私立4年制大学女子では政治的無関心の傾向が強いことが示された。このような結果は、女子大学に所属する被調査者の多い私立4年制大学女子グループの特徴を示していると考えられる。そして、この傾向はとりもなおさず、依田の指摘を裏付けているといえよう。

これまで行ってきた結果の検討から、高校段階での社会的態度の様相と大学段階での様相との関連をさらに

明確にする必要性が感じられる。さらに、大学4年間の間に青年の社会的態度はどのように変容していくのかという問題も検討されなければならないだろう。青年期にいわゆる自我の再構成が行なわれるならば、社会的態度も大きく変容すると思われる。しかし一方、中学生から大学生の時期にかけて、きわめて平穏な青年期を送る青年が増加するならば、社会的態度に著しい変化は認められないであろう。

付 記

本研究のための調査の実施に際して、各大学の心理学担当教官の多大なご協力を得た。記して感謝します。

文 献

- 狩野素朗 1967 大学生の価値観—その1— 厚生補導, 15, 32—38.
- 経済企画庁 1978 日本人の教育観と職業観—生活欲求の実態とアクセシビリティ— 大蔵省印刷局
- 久世敏雄・速水敏彦 1974 中学生・高校生の社会的態度に関する研究（Ⅰ）名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）, 21, 1—11.
- 久世敏雄・速水敏彦 1975 中学生・高校生の社会的態度に関する研究（Ⅱ）名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）, 22, 13—24.
- 久世敏雄・後藤宗理・宮沢秀次・二宮克美・池田博和・伊藤義美・石黒敬子 1977 中学生・高校生の社会的態度に関する研究（Ⅲ）名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）, 24, 67—83.
- 久世敏雄・浅野敬子・伊藤義美・後藤宗理・宮沢秀次・二宮克美・池田博和 1978 中学生・高校生の社会的態度に関する研究（Ⅳ）名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）, 25, 119—129.
- 久世敏雄・後藤宗理・二宮克美・宮沢秀次・池田博和・伊藤義美・浅野敬子 1979 中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究（Ⅰ）名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）, 26.
- 日本リクルートセンター 1979 高校生は何を考えているか'79.
- 依田 明 1973 現代青年の道徳観 現代青年心理学講座第4巻「青年の性格形成」金子書房 190—216.
(1979年8月17日受理)

大学生の社会的態度に関する研究

付 表

この調査は社会や学校や家庭などに対するみなさんの考え方や態度について調べるものです。現代の青年が一般的にどのような考え方をしているのかをみるのが目的ですから、思ったまま卒直に答えて下さい。

名古屋大学教育学部教育原論研究室
発達心理学研究室

{ _____ 大学} { _____ 学部} { _____ 年} {満 _____ 歳} {男 ・ 女}

{ _____ 高校} { _____ 科} { _____ 年} {満 _____ 歳} {男 ・ 女}

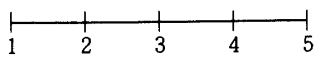
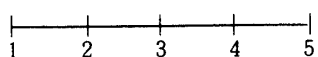
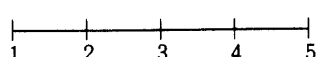
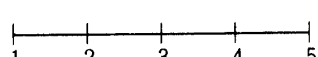
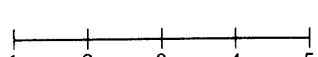
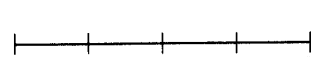
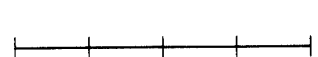
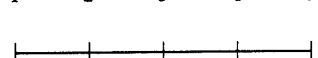
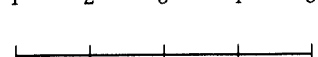
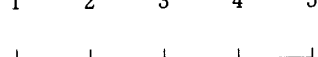
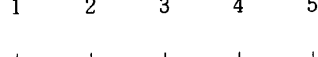
(該当する下線の部分を記入し、性別はあてはまる方を○で囲んで下さい)

調 査 A

1 (やり方)

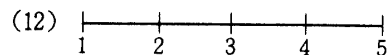
次の39のそれぞれの考え方や態度について、あなたが実際にどう考えているかを 1非常に賛成 2賛成 3賛成とも反対ともいえない 4反対 5非常に反対のうちから1つ選んで○印をつけて下さい。

非 賛 な 賛 反 非
常 成 い と 成 反 常
に 成 ないともい 成とも 反 反
賛 成 てもい 成とも 対 対
成 ないともい 成とも 対 対
成 てもい 成とも 対 対
成 てもい 成とも 対 対
成 てもい 成とも 対 対

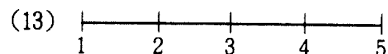
- | | |
|--|--|
| (1) 国の政治は政治家にすっかりまかせた方がよい | (1)  |
| (2) 個人の自由は尊重すべきである | (2)  |
| (3) 流行語などはよく知っていないとはずかしい | (3)  |
| (4) 女が政治などに口だしすべきでない | (4)  |
| (5) 正しいことであれば世間体など気にすべきでない | (5)  |
| (6) 労働者や大学生のストライキやデモ活動などは関心がない | (6)  |
| (7) 結婚は家柄を重んじなければならない | (7)  |
| (8) いくら恩義のある人でも筋道のとおらない頼みごとは断った方がよい | (8)  |
| (9) みんなが見ているテレビ番組を見ていないと、とりのこされる気がする | (9)  |
| (10) 伝統や習慣は尊重すべきである | (10)  |
| (11) 社会のために正しいことであるなら親の反対をおしきっても行動すべきである | (11)  |

非常に賛成 賛成 ない 対ともい 賛成とも反 反 非常に反対
 1 2 3 4 5

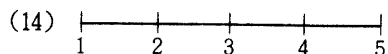
(12) 国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない



(13) 世間をわたるには義理や人情が最も大切である



(14) いくら伝統だからといっても不合理なことはやめるべきである



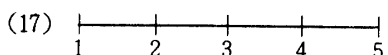
(15) 高校や大学時代には政治の問題など考えるよりレジャーを楽しんだ方がよい



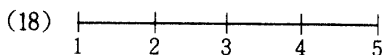
(16) 長男が家をつぐのは当然だ



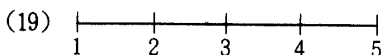
(17) デモヤストをするのは労働者の当然の権利である



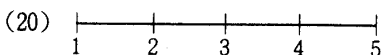
(18) 理論よりフィーリングやムードが大切である



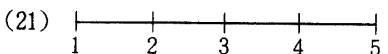
(19) 親孝行は子どもの義務である



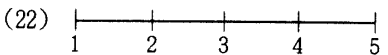
(20) 先輩の意見でも、まちがっていると思えば、納得できるまで議論する



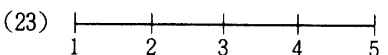
(21) 誰が衆議員の選挙で当選しようと日本の政治はかわらないと思う



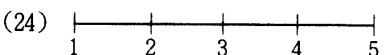
(22) 目上の人にはもっと敬語を使った方がよい



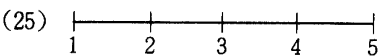
(23) 男女の交際は全く自由であり、まわりの人がとやかく言うべきでない



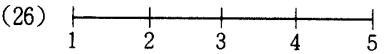
(24) 今の世の中では平凡な家庭の中にささやかな幸福を求めた方がよい



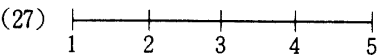
(25) 学校で定めている校則にはどんな場合にも従うべきである



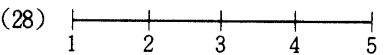
(26) 政治をよくするためには、もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである



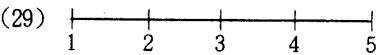
(27) 共同募金や歳末助け合い運動があるとなるべくさけるようにする



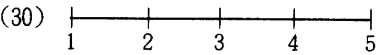
(28) 世の中の秩序を守るために上下関係はなくてはならない



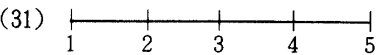
(29) 家庭内の仕事は男女平等に分担すべきである



(30) ベトナム戦争など日常生活とかけはなれた政治問題など考えるのはめんどろだ



(31) 日本は天皇を中心にまとまるべきである



大学生の社会的態度に関する研究

非常
に賛
成

賛
成

な
い

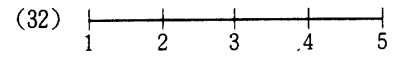
対
も
と
も
い
え

賛
成
と
も
反
対

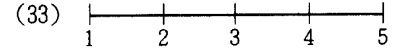
反
対

非常
に反
対

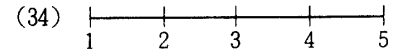
(32) 「方角が悪い」などということはまったく信用しない



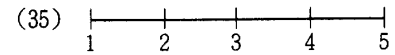
(33) いつの世でもお金がなければ幸福にはなれない



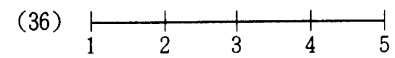
(34) デモやストでさわぐのは民主国家の恥である



(35) 結婚式などの儀式はなるべく簡素化するのがよい



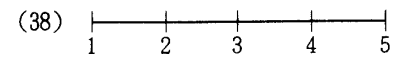
(36) 皆と同じような持物や服装をしていないとひけめを感じずる



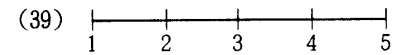
(37) 家庭では父親がすべての実権をにぎるのが望ましい



(38) 家庭では子どもの意見も大人の意見と同等に尊重されるべきである



(39) 公害問題は被害者と加害者だけの問題である



A STUDY OF SOCIAL ATTITUDE OF THE COLLEGE STUDENTS

Motomichi GOTO, Toshio KUZE, Shuji MIYAZAWA, and Katsumi NINOMIYA

The present study is carried out to examine how the social attitudes of college students develop, and to clarify the relations of sex, major, and establishing body of college to social attitudes. The social attitudes for the present study consist of conservative, radical, and mass-social scales. The questionnaire used is the revised edition of the one administered for high school students. Subjects are 1566 college students. They represent seven subject groups; females of private junior colleges (FPC); males and females who belong to the division of humanities in national universities (MHN, FHN); males and females who belong to the division of science in national universities, and to national and prefectural junior colleges (MNN, FNN); males and females of private universities (MPU, FPU).

The major findings are:

- 1) The mean scores for the radical scale are higher than those for the other two scales in every group.
- 2) For the conservative scale, mean scores of MPU and FPU are higher than those of the other groups. Means of FHN is the lowest. Mean scores of FPU is the lowest for the radical scale, and is the highest for the mass-social scale.
- 3) Correlation coefficients between conservative and radical scales, and those between radical and mass-social scales in all groups are significantly negative. And, correlation coefficients between conservative and mass-social scales in all groups are significantly positive except for EPC.
- 4) The factor analysis based on all subjects produced the following four factors. They are labeled as (I) indifferentism to political problems, (II) conservatism, (III) mass-social conformity and (IV) democratic spirit respectively.
- 5) The mean factor scores and mean scores of each item in the questionnaire showed that the students of private universities are more conservative than those of national and prefectural universities and junior colleges.

Finally, questions may arise regarding, what factors cause differential social attitude within difference of sex and establishing body of university, and how the findings in the present study are related to those of the study of high school boys and girls.